

修士論文（要旨）
2020年1月

青年期用省察尺度の作成

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
218J4003
熊野 仁士

Master's Thesis(Abstract)
January 2020

The Development of a Reflection Scale for Adolescents

Hitoshi Kumano

218J4003

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

第1章 問題と目的	1
1.1 青年期および MBT における自己注目	1
1.2 私的自己意識および省察, 反芻の定義	1
1.3 わが国における私的自己意識および省察, 反芻に関連する尺度研究	2
1.4 省察の臨床的意義	5
1.5 本研究の目的と意義	5
1.6 仮説	6
第2章 方法	6
2.1 対象者	6
2.2 調査期間	6
2.3 手続き	6
2.4 使用尺度	7
2.5 分析方法	9
2.6 倫理的配慮	10
第3章 結果	10
3.1 回収率・有効回答率および調査対象者の属性	10
3.2 項目分析	10
3.3 探索的因子分析	10
3.4 確認的因子分析	11
3.5 信頼性の検討	11
3.6 性差の検討	11
3.7 相関分析	12
3.8 パス解析および単回帰分析	12
第4章 考察	13
4.1 因子構造の検討	13
4.2 信頼性の検討	13
4.3 並存的妥当性の検討	13
4.4 弁別的妥当性の検討	14
4.5 性差の検討	14
4.6 青年期用省察尺度の総評	14
4.7 臨床的意義	15
4.8 限界と展望	15
参考文献	I
資料	i
資料 1 自己注目に関する尺度項目	i
資料 2 質問紙	vi

第1章 問題と目的

青年期は、アイデンティティを形成する上で、自己に注目し、自己理解を深めることが重要であると考えられる。また、青年期に限らず、「行動を、内的な精神状態と結びつけているものとして、想像力を働かせて捉えること、あるいは解釈すること」(Allen, Fonagy, & Bateman, 2008 狩野監修 2014)である、メンタライジングの促進においても、自己に注目し、自己理解を深めることは重要であるといえる。

省察は「知的好奇心によって動機づけられた、自己へ注意を向けやすい特性」と定義されており、自己理解を促す、私的自己意識(「自己の内面や感情、気分など、他者からは直接観察されない自己の側面に注意を向ける程度に関する個人差」)(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)の適応的な側面として位置づけられている。青年期においては、この省察が促進されることにより、自己理解が深まり、アイデンティティ形成が促進されると考えられる。また、省察によって自己理解が促進されることで、「行動を、内的な精神状態と結びつけているものとして、想像力を働かせて捉えること、あるいは解釈すること」(Allen, Fonagy, & Bateman, 2008 狩野監修 2014)である、メンタライジングも促進されると考えられる。メンタライジングは、精神療法的介入における共通因子である(Allen, Fonagy, & Bateman, 2008 狩野監修 2014)ため、省察を測定する尺度が作成されることによって、そういった精神療法的介入における共通因子を促進する要因についても、検討が可能になるだろう。

わが国においては、省察を測定する尺度として高野・丹野(2008)が作成したRumination-Reflection Questionnaire 日本語版(以下「RRQ 日本語版」と表記する)が存在するが、この尺度は、省察を適切に反映しきれていない尺度項目が存在する。一方で、私的自己意識や、内面への自己注目を測定している尺度の中には、省察を適切に反映していると考えられる尺度項目が複数存在する。そのため、省察を適切に測定する上では、そういった既存の尺度項目を取り入れた尺度を作成することが望ましいと考えられる。

そこで本研究では、RRQ 日本語版を含む、私的自己意識や内面への自己注目を測定している尺度を参考に、青年期にとって重要な、省察を測定する尺度(青年期用省察尺度)の作成を行い、その信頼性と妥当性の検討を行う。

尺度作成にあたり、本研究では省察を、「知的好奇心によって動機づけられた、自己へ注意を向けやすい特性」(Trapnell & Campbell, 1999)と定義し、以下の仮説を設定する。

仮説①:省察は自己理解を促進するため、自身の内面を把握する能力と正の関連がある。
(並存的妥当性)

仮説②:省察は、内面への知的好奇心によって動機づけられているため、開放性と正の関連がある。(並存的妥当性)

仮説③:省察は、私的自己意識の不適応的な側面を反映していないため、抑うつとの相関係数は.30以下となる。(弁別的妥当性)

また、以上の仮説の他、本研究では省察における性差についても、探索的に検討を行う。

第2章 方法

18歳~24歳の大学生を対象に、質問紙調査を実施した。使用した尺度は以下の通りである。

(1) 青年期用省察尺度原案

大学院生 3 名が、私的自己意識に関する既存の尺度から、省察を反映していると考えられる尺度項目を選出し、作成された尺度である。心理学に精通した専門家に内容を確認し、内容的妥当性が確認されている。

(2) 対自的メンタライゼーション (山口, 2016) (12 項目)

仮説②および仮説④を検討するため、メンタライゼーション質問紙の下位尺度である「対自的メンタライゼーション (Mentalization of Self, 以下「MS」と表記する)」を用いた。この尺度は、自己の内面を適切に捉えている程度について測定している。「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。

(3) 開放性 (下仲・中里・権藤・高山, 1999) (12 項目)

仮説③および仮説④を検討するため、NEO-Five Factor Inventory 日本語版 (以下「NEO-FFI」と表記する) (下仲・中里・権藤・高山, 1999) の下位尺度「開放性」を用いた。開放性は、「経験を積極的に求め楽しむ」ことや「馴染みのないものに耐えられ求める」こと (下仲・中里・権藤・高山, 1998) について測定していると考えられている。「全くそうでない」から「非常にそうだ」の 5 件法で回答を求めた。

(4) CES-D 日本語版 (島, 1985) (20 項目)

仮説⑤を検討するため、The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale 日本語版 (以下「CES-D 日本語版」と表記する) (島, 1985) を用いた。この尺度は、抑うつについて測定している。抑うつ症状の頻度について、「全くないかあったとしても 1 日もつづかない」から「週のうち 5 日以上」の 4 件法で回答を求めた。

第 3 章 結果および考察

青年期用省察尺度原案に対して因子分析を行った結果、1 因子構造が妥当である判断され、13 項目が尺度項目として採用された。また、 α 係数は $\alpha = .92$ の値を示した。

性差を検討するため t 検定を行った結果、MS は男性が有意に高いことが確認された。

青年期用省察尺度 (省察) と MS の間にはほとんど相関が示されなかった。よって、仮説①は支持されなかった。これは、省察が自己の内面への注目を測定しているのに対し、MS は、自己の内面に注目した上で、さらに思考や感情を言語化する能力を測定しているためであると考えられる。

省察と開放性の間には有意な関連が示された。よって仮説②は支持された。本研究によって作成された尺度は、知的好奇心と関連している可能性が示唆された。

省察と抑うつの間にはほとんど相関が示されなかった。よって仮説③は支持された。本研究によって作成された尺度は、私的自己意識の不適応的な側面を反映していない可能性が示唆された。

本研究によって作成された尺度は、知的好奇心と関連しており、また、私的自己意識の不適応的な側面を反映していない可能性があるため、省察の定義および理論的位置づけを反映している尺度である可能性が示唆された。本研究によって作成された青年期用省察尺度によって今後、精神療法的介入における共通因子として注目されている、メンタライジングの促進および、青年期の自己像形成に関連する諸要因の検討がなされることが期待される。

参考文献

- Allen, G. J., & Fonagy, P. (2006). *Handbook of Mentalization-Based Treatment*. England: John Wiley & Sons. (J.G.アレン・P.フォナギー 狩野 力八郎 (監訳) (2011). メンタライゼーションハンドブック—MBT の基礎と臨床— 岩崎学術出版社)
- Allen, G. J., Fonagy, P., & Bateman, W. A. (2008). *Mentalizing in Clinical Practice*. Washington D. C.: American Psychiatric Publishing. (J.G.アレン・P.フォナギー・A.W.ベイトマン 狩野 力八郎 (監訳) (2014). メンタライジングの理論と臨床—精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合— 北大路書房)
- Bateman, W. A., & Fonagy, P. (2008). *Psychotherapy for Borderline Personality Disorder: Mentalization-Based Treatment*. England: Oxford University Press. (A.ベイトマン・P.フォナギー 狩野 力八郎・白波瀬 丈一郎 (監訳) (2008). メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害—MBT が拓く精神分析的な治療法の新たな展開— 岩崎学術出版社)
- Duval, S., & Wicklund, R. A. (1972). *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Erikson, H. E. (1959). *Identity and the Life Cycle*. USA: International Universities Press. (エリック・H・エリクソン 西平 直・中島 由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Fenigstein, A., Scheir, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43* (3), 522-527.
- 金子 智昭 (2017). 大学生の自己意識に関する研究—改訂版自己意識尺度の作成と心理的適応の関連性— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, *84*, 15-33.
- Martin, L. L., & Tesser, A. (1996). Some ruminative thoughts. In R. S. J. Wyer (Ed.), *Ruminative thoughts* (pp.1-47). Hillsdale, NJ, USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- 岡田 努 (1991). 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, *1*, 11-18.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, *4* (2), 162-170.
- 押見 輝男・渡辺 浪二・石川 直弘 (1985). 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, *28*, 1-15.
- 坂本 真士 (1997). 自己注目と抑うつ性 社会心理学 東京大学出版会
- 坂本 真士 (1998). 自己注目と抑うつ—抑うつ性の発症・維持を説明する 3 段階モデルの提起— 心理学評論, *41* (3), 283-302.
- 佐藤 有耕・落合 良行 (1995). 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴 筑波大学心理学研究, *17*, 61-66.
- 島 悟 (1985). 新しい抑うつ性の自己評価尺度について 精神医, *27*, 717-723.
- 下仲 順子・中里 克治・権藤 恭之・高山 緑 (1998). 日本版 NEO-PI-R の作成とその

- 因子的妥当性の検討 性格心理学研究, 6(2), 138-147.
- 下仲 順子・中里 克治・権藤 恭之・高山 緑 (1999). NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理
- Smith, T. W., & Greenberg, J. (1981). Depression and self-focused attention. *Motivation and Emotion*, 5(4), 323-331.
- 菅原 健介 (1984). 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55(3), 184-188.
- 鈴木 圭子 (1997). 青年期: 前期—大学生を中心に— 馬場 禮子・永井 徹 (編) ライフサイクルの臨床心理学 (pp.108-125) 培風館
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, 16(2), 259-261.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2009). 抑うつと私的自己意識の 2 側面に関する縦断的研究 パーソナリティ研究, 17(3), 261-269.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2010). 反芻に対する肯定的信念と反芻・省察 パーソナリティ研究, 19(1), 15-24.
- Trapnell, P. D., & Campbell, J. D., (1999). Private self-consciousness and the Five-Factor Model of personality: Distinguishing rumination from reflection. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(2), 284-304.
- 辻 平治郎 (1998). 5 因子性格検査の理論と実際—こころをはかる 5 つのものさし— 北大路書房
- 辻 平治郎 (2003). 自己意識と自己内省—その心配との関係— 甲南女子大学研究紀要 人間科学編 40, 9-18.
- Watkins, E., Moberly, N., & Moulds, M. L. (2008). Processing mode causally influences emotional reactivity: Distinct effects of abstract versus concrete construal on emotional response. *Emotion*, 8(3), 364-378.
- 山口 正寛 (2016). メンタライゼーションと境界性パーソナリティ傾向との関連—メンタライゼーション質問紙作成の試みから— 福山市立大学教育学部研究紀要, 4, 129-136.